

名古屋・白壁地区の緑に表れる都市の持続的文脈

Greenery as expression of the durable urban context in Shirakabe area, Nagoya

齊 藤 由 香

Yuka SAITO

長谷川 泰 洋

Yasuhiro HASEGAWA

竹 中 克 行

Katsuyuki TAKENAKA

I. 都市の緑をみる視点

1) 研究の背景

われわれがふだん目にしている都市の姿形は、基盤をなす地形・水文環境の上に町割・地割などの人工的なフレームが構築され、そこに土地・空間利用が組み合わさることで生み出されたものである。いかなる都市にも時とともに蓄積された独自の文脈があり、都市が有する個性の重要な一部をなしている。都市工学の西村らは、都市空間をおりなす文脈を無数の主体による集会的関与の総体としてとらえ、「都市空間の構想力」と呼んでいる（東京大学都市デザイン研究室編，2015）。そうした観点にたてば、長きにわたる人と土地のかかわり合いのプロセスが刻印されている歴史的町並みは、構想力が凝縮する空間といえるだろう。

他方、歴史的町並みといえども、積層している要素すべてが等しく古いわけではない。たとえば、地形・水文環境とその上に形成された街路網、あるいは街路に面して建つ家屋群では、成立時期や変化の速さがまったく異なる。蓄積された空間文脈を都市づくりにいかす応用的視点にたつとき、古いものほど価

値が高いという単純な価値基準を採用することは適当でない。舞台セットのような画一化された歴史的町並みではなく、進化の営力を内蔵する生きた歴史都市を未来に継承するには、関係性の視点から都市計画の方向転換を主張する小浦（2008）が言うところの、「変化をつなぐ」発想が不可欠である。

これらの研究蓄積に触発されつつ、筆者らは、ランドスケープを重視する地理学の立場から、人と土地のかかわり、そしてかかわりを共有する人々の交点に現れる都市の持続的空間文脈を探求する「空間コード研究」を推進している（竹中編，2016）。とくに歴史的町並みについては、さまざま異なる波長をともなって継起するリズムを重視し、近世城下町の町割や近代の鉄道建設など、のちの社会基盤を用意したビッグイベントとともに、地縁や水の縁のような人々の日常に根づいた空間の作法を注視している。そうした見取図のなかで、都市の緑は、月・年単位で入れ替えが行われる鉢植えから樹齢数百年を数える保存樹まで幅はあるものの、変化のサイクルが比較的短いという特徴を有する。しかし同時に、変わりゆく姿を確認できるからこそ、人間の意識的・主体的なかかわりを誘発する

という、緑のもう一つの側面も見落とすことができない。

2) 研究目的と対象地域

こうした問題意識から、本研究では名古屋市の歴史的町並みに現れる緑に着目し、持続性のある空間パターンをなす緑の現れ方を明らかにするとともに、そうしたパターンを持続させている要因について考察することを目的とする。

名古屋市は、市内に残る歴史的町並みを保存する目的で、1980年代半ばに有松、白壁・主税・榑木、四間道、中小田井の4地区を町並み保存地区に指定した（図1）。本稿では、このうち東区の白壁・主税・榑木地区（以下、白壁地区と略す）に焦点を当てる。

白壁地区は、名古屋城の東側に位置するかつての武家屋敷地である¹⁾。名古屋城の築城（1615年）にともなう城下町整備（清須越し）のさいに、この一帯は300石級の中級武士の居住地とされ、100～300坪の敷地をもつ武家屋敷が建ち並んだ。

明治期になると、輸出用の陶磁器産業が白壁地区に成立し、数多くの陶磁器の絵付け工場や貿易業者が軒を連ねた。その要因としては、広い屋敷跡地が工場用地として利用できたこと、やきもの産地の美濃・瀬戸と名古屋港に繋がる堀川を結ぶ物流軸上に位置していたことが指摘される²⁾。

大正・昭和期には、陶磁器関連の貿易商のほか、名古屋の財界人や企業家たちが白壁地区に移り住み、広大な敷地に和風建築や近代

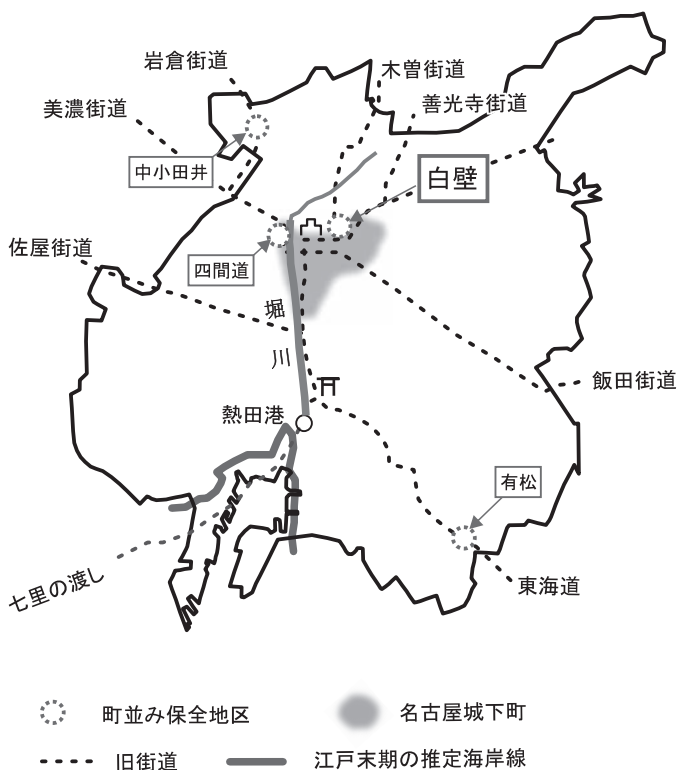


図1 名古屋市における町並み保全地区と白壁地区の位置（名古屋市の資料をもとに筆者作成）

洋風建築の立派な邸宅を建てた。なかでも、現存する春田鉄次郎邸、井元為三郎邸(現「文化のみち榎木館」)、桜井家住宅は、戦前に建設された近代建築として価値を認められ、名古屋市より景観重要建造物の指定を受けている。

白壁地区は、これらの近代建築が残されていること、また江戸時代の町割を継承する白壁町筋・主税町筋・榎木町筋に沿った武家地の面影をとどめていることから、1985年、白壁・主税・榎木町並み保全地区に指定された(名古屋市教育委員会、1985)。

現在は、名古屋市内の閑静な住宅地の一つとして評価され、戸建住宅のほか、マンションの建設も進んでいる。また、都市計画法による用途地域として第二種住宅地域に指定されていることから、住宅以外にも、結婚式場やレストラン、オフィスなどの事業所の立地がみられる。

3) 研究方法

現在の白壁地区における緑の現れ方を把握するため、2017年10月～12月、8回にわたる現地調査を実施した。調査にあたっては、国道41号線を挟んで東西2か所に南北400m×東西80mの調査エリアを設定した(図2)。このうち、町並み保全地区に指定されているのは東エリアのみであるが、比較の対象として西エリアを設定した。その理由として、西エリアは、町並み保全地区に含まれていないものの、東エリアと同様、かつては武家屋敷地であったことがあげられる。また、都市計画上、第二種住宅地域に指定される東エリアに対して、近隣商業地域に分類される西エリアでは、土地・空間利用や緑の現れ方において、東エリアとは異なる特徴が見出されることにも注目した。

調査のさいには、道路から視認可能な緑を対象に、樹木の位置、分布、樹高、樹種など



図2 調査エリアと調査地点(サイト)の位置 (Google Mapをもとに筆者作成)

を目視により把握した。調査地点（以下、サイトと称す）ごとにIDを振りデータの整理を行い、その位置情報をGoogle Map上で記録した。ここでいうサイトとは、道路から確認される、物理的（フィジカル）に存在する緑のまとまりのことであり、現地調査では概ね敷地単位でその分布を把握した。その結果、東エリアで72、西エリアで63の合計135サイトが確認された。集めたデータの分析により、現在の緑の現れ方のパタン化を試みた。

次に、緑のパタンを生み出した背景を明らかにするため、新旧の地図資料を用いて、町割・土地利用および緑被の変化を時系列的に分析した。対象時期は、戦後から現在までとし、20年刻みで1950年代、1970年代、1990年代、2010年代の4時点をとることとした³⁾。

町割および土地利用については、Arc GISを活用し、国土地理院の基盤地図情報と名古屋市の都市計画基本図を重ね合わせることで図化した。そのさいには、2017年12月時点の最新の基盤地図情報をベースマップとし、過

去の年次の都市計画基本図から抽出した道路緑と建物に関する情報をもとにベースマップを編集した。また、土地利用の変化を知るために、住宅地図を一部参照した⁴⁾。緑被に関しては、国土地理院および名古屋市提供の航空写真を活用し⁵⁾、目視により各年次の緑被をトレースし、図化するとともに緑被率を算出した。以上を行ったうえで、町割・土地利用の変化と緑被の変化とを比較しながら、両者の関係性を探った。

II. 緑の現れ方のパタン化

1) パタン化のカテゴリ

ここでは、現在の緑の現れ方の特徴を把握するため、現地調査で得られたサイトごとのデータをもとにパタン化を試みる。

パタン化のカテゴリとして、「樹高」「連続性」「配置」の4つの要素を設定し、各々について、以下に述べるようにタイプ分けをした（表1、図3）。

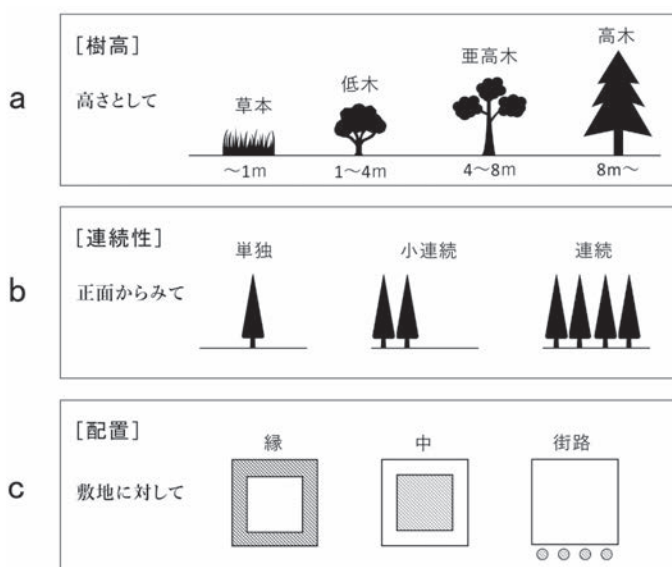


図3 緑のパタン化のカテゴリとそのタイプ（現地調査の結果をもとに筆者作成）

表1 緑のパタン化のカテゴリとそのタイプ

カテゴリ	タイプ			
樹高	草本	低木	亜高木	高木
連続性	単独	小連続	連続	
配置	緑	中	街路	
樹種	在来	外来/園芸		

(現地調査の結果をもとに筆者作成)

「樹高」(図3-a)は、樹木の高さにより、草本ならびに1m以下の樹木を「草本」、1~4mの樹木を「低木」、4~8mの樹木を「亜高木」、8m以上の樹木を「高木」の4つのタイプに分けた。

「連続性」(図3-b)は、道路から敷地を正面視したさいの緑の現れ方を指す。樹木が単独で立っている場合を「単独」、数本が束になって立っている場合を「小連続」、連続的に立っている場合を「連続」とした。「小連続」は、敷地の左右のいずれかに寄っていることが多い。

「配置」(図3-c)は、敷地内における緑の位置のことであり、道路際のように敷地の縁(ふち)にのみ緑が並んでいる場合を「緑」、

緑のみでなく庭の中まで分布している場合を「中」、敷地の中ではなく、街路樹として存在する場合を「街路」とした。

「樹種」については、おおむね名古屋市内に自生する種を「在来」、それ以外のものを「外来/園芸」とした。

まず、東西各エリアにおける緑の現れ方の特徴をとらえるため、カテゴリごとにタイプ別の出現サイト数をカウントした(表2)。その結果、東エリアでは西エリアと比べて「亜高木~高木」「連続」「中」「在来」の比率が高いことが明らかになった。つまり、東エリアでは、樹高の分布から、樹齢の比較的高い木が多く含まれることが示唆され、連続性と配置の観点からみても、まとまりとボリュームのある緑が多い。また、西エリアと比較して、東エリアでは在来種が多く含まれる点も注目に値する。

2) 緑被パタンの空間的分布

続いて、サイトごとの特徴を明らかにするため、先の4つのカテゴリを掛け合わせるこ

表2 調査エリアにおける各カテゴリのタイプ別の出現サイト数の割合

		西エリア	東エリア
[樹高]	草本	22%	7%
	低木	29%	32%
	亜高木	27%	33%
	高木	22%	28%
[連続性]	単独	8%	4%
	小連続	56%	44%
	連続	37%	51%
[配置]	緑	81%	63%
	中	11%	35%
	街路	8%	3%
[樹種]	在来	14%	24%
	外来/園芸	86%	76%

(現地調査の結果をもとに筆者作成)

とで得られるタイプの組合せを緑被パターンと定義し、サイトごとの緑被パターンを抽出した。その結果、西エリアで22通り、東エリアで23通りの緑被パターンが確認された。さらに、それらの分布を地図に落とすことで、緑の現れ方の空間的パターンを把握した。代表的なパターンとして、以下では、①両エリアに共通して多いパターン、②西エリアに顕著なパターン、③東エリアに顕著なパターンの3つを提示する。

図4～図6は、2015年現在の道路緑と建物を表示した地図の上に、各エリアの緑被ならびに該当する緑被パターンの分布を重ね合わせたものである。これを見ながら、各エリアにおける緑の現れ方を検討する。

①両エリアに共通して多いパターン

東西の両エリアに共通して最も多くみられたのは、「低木・小連続・縁・外来／園芸」および「亜高木・小連続・縁・外来／園芸」のタイプである（図4）。これらは、樹高の違いをのぞけば、緑の現れ方として類似した特徴をもち、建物の縁や隅に置かれた植木タイプの緑といえる（写真1-①）。図4からも、個人宅の軒先や、マンションの入口の脇などに分布していることが確認される。樹種としては、トウカエデ、サルスベリ、サクラ類（ソメイヨシノ、シダレザクラ）、サツキ、カイヅカイブキなどの外来種や園芸種が優占する。

②西エリアに顕著なパターン

西エリアに多くみられたパターンとして、「高木・連続・縁・外来／園芸」と「草本・小連続・縁・外来／園芸」の2つがあげられる（図5）。前者は、高木で連続性があり、敷地の縁を囲む外来種の緑である。図5から読み取れるように、主に主税町公園のまとまった緑がこれに該当する（写真1-②左）。主な高木の樹種として、イチヨウ、ケヤキなどがある。また後者は、1m以下の草本または樹木で、主にマンションなどの軒先に植えられた園芸

的な緑である（写真1-②右）。図5より、建物の道路際に分布していることがわかる。主な草本層の植物として、オタフクナンテン、ヤブラン、ジャノヒゲなどがある。

③東エリアに顕著なパターン

東エリアに顕著にみられたのは、「高木・連続・中・外来／園芸」と「亜高木・連続・中・在来」の2つのパターンである（図6）。これらは、比較的樹高が高く、連続性があり、敷地の中を埋める緑という点で共通し（写真1-③）、ボリュームのあるまとまった緑が多いという、東エリアについて述べた先の観察とも符号する。図6からは、これらパターンの分布が白壁町筋から主税町筋にかけての屋敷地の庭の緑に一致することがわかる。また樹種に着目すると、クロガネモチ、イヌマキ、モチノキなど、在来種の優占するサイトがみられる。次章で説明する緑被の時系列的分析を考え合わせると、在来種の多いサイトでは、武家屋敷時代からの敷地割の変化が少なく、時代を越えて樹種が継承されている可能性が示唆される。ちなみに、上に述べたようなパターンは、西エリアではまったくみられなかった。

Ⅲ. 緑被の時系列的分析

1) エリア全体でみた緑被率の変化

Ⅱで明らかになった緑被パターンの持続性を検討するため、1950年、1976年、1995年、2015年の4時点の航空写真をもとにした緑被の時系列分析を行う。

最初に、調査エリア全体の緑被率の変化をみるため、東西各エリアの年次ごとの緑被率を算出した（表3）。ここでいう緑被率とは、調査エリアの全面積に占める緑被の割合のことである。緑被として扱ったのは、航空写真上で視認可能な樹林地のみであり、草地などは除外している。



- …亜高木・小連続・緑・外来／園芸
- …低木・小連続・緑・外来／園芸

図4 白壁地区における緑被パタンの空間的分布①：両エリアに共通するパターン（現地調査の結果をもとに筆者作成）



- …高木・連続・緑・外来／園芸
- …草本・小連続・緑・外来／園芸

図5 白壁地区における緑被パタンの空間的分布②：西エリアに顕著なパターン（現地調査の結果をもとに筆者作成）



- …高木・連続・中・外来／園芸
- ◎…亜高木・連続・中・在来

図6 白壁地区における緑被パタンの空間的分布③：東エリアに顕著なパターン（現地調査の結果をもとに筆者作成）

両エリアを比較すると、都心や官庁街に近接する西エリアでは、東エリアに比べて全体的に緑被率が低いことがわかる。また、経年的にみると、西エリアでは比較的数値を維持しているのに対して、東エリアでは減少傾向にある。これは、都市化にともない緑量が減少の一途をたどる、名古屋市全体の傾向と一致するものである。

2015年現在の白壁地区の緑被率は、西エリアが15.1%、東エリアが18.2%である。これらの数値は、表面的には名古屋市全体の緑

被率の22.0%を下回っているが、この全市の数値には樹林地のほか、芝・草地、農地、水面も含まれている。そのうち、樹林地の比率が市面積の10.7%であることを考慮すると、白壁地区の緑被率は、都心に近接する市街地としてはむしろ高いといえることができる。

以下では、白壁地区における戦後の都市計画や都市開発の歴史と関連づけながら、東西各エリアにおける緑被の経年変化をみていく（図7，図8）。

表3 調査エリアにおける緑被率の変化（1950年～2015年）

	西エリア	東エリア
1950年	13.7%	20.8%
1976年	15.5%	24.2%
1996年	13.2%	23.3%
2015年	15.1%	18.2%

（航空写真から得た緑被データをもとに筆者作成）

①両エリアに共通して多いパタン



低木・小連続・緑・外来／園芸



亜高木・小連続・緑・外来／園芸

②西エリアに顕著なパタン



高木・連続・緑・外来／園芸



草本・小連続・緑・外来／園芸

③東エリアに顕著なパタン



高木・連続・中・外来／園芸



亜高木・連続・中・外来／園芸

写真1 白壁地区における緑の現れ方の代表的パタン
(2017年10月～12月筆者撮影)

2) 西エリアにおける緑被の経年変化

東エリアに比べて、より都心に近く、戦後の早い時期に開発が進んだ西エリアでは、1950年代でさえ、武家屋敷地の名残がほとんど認められない（図7）。国の出先機関が入る行政施設⁶⁾をのぞけば、小規模な民家や長屋が建ち並ぶ景観で、緑被については、民家の庭先や建物の周辺に植えられた小さな緑が中心であった。

1970年代には土地区画整理事業が行われ、新たな道路の建設や公園の整備が進んだ。景観がとくに大きく変化したのは、エリア内の南半分の街区である。のちにエリア内の中心的な緑となる主税町公園が開園し（1970年）、その南側の街区では道路が新設された。新たに整備された土地には、公務員宿舎や企業の社宅などの大型の集合住宅が建設され、結果

として、一部の民家とその周辺の緑が消失している。ただし、主税町公園の植樹により緑量が増加したため、1970年代の緑被率は1950年代と比べ微増している。

1990年代以降はさらに開発が進み、マンションや事業所ビルの建設、駐車場化が相次いだ。これにともない、1970年代にはエリア内に点在していた緑が、1990年代になると消失していることがわかる。その後もマンションや事業所ビルの建設によって緑が無くなった場所があるが、2010年代の緑被率は1990年代のそれに比べてさほど落ち込んでいない。その理由として、主税町公園の緑など既存の緑が生長し、ボリュームを増すと同時に、マンションなどの新設のさいに植栽が行われ、微量ではあるものの新たな緑が加えられていることが想定される。



図7 白壁地区における緑被の経年変化（西エリア，1950年～2015年）
各図の下部の数字は、各年代の緑被率を示す。
（航空写真から得た緑被データをもとに筆者作成）

3) 東エリアにおける緑被の経年変化

東エリアは、戦中に南端の街区が空襲により焼失した。1950年代の図をみると(図8)、榎木町筋の南側にほとんど緑が分布していないのはそのためである。それに対して、幸いにして戦災を逃れた榎木町筋以北の街区では、戦後まで広大な屋敷地の庭の緑が維持された。1950年代の東西エリアの緑被率を比較すると、東エリアは被災しているにもかかわらず、西エリアよりも高い緑被率を示している。これは、屋敷地の豊かな緑が当時の東エリアのかなりの部分を覆っていたためである。

1970年代に入ると、土地区画整理事業によって山吹谷公園が開設され(1971年)、1950年代にはほとんど緑のなかった南端の街区の緑化が進んだ。土地区画整理が行われなかった公園北側の街区(榎木町筋~白壁町

筋)では、1970年代も土地利用に大きな変化はなく、1990年代まで屋敷地の庭の緑が維持された。その結果、1970年代における東エリア全体の緑被率は上昇している。

ところが、1990年代後半以降、東エリアでも急速に不動産開発が進んだ。広大な屋敷跡地を利用して大規模なマンションがいくつも建設され、庭木として植えられていた多くの緑が失われた。またかつての長屋が取り壊され、駐車場化したところでも同様に緑が無くなっている。1990年代と2010年代の図を見比べると、こうした場所でまとまった緑が消失していることがわかる。

西エリアと同様に、東エリアでも山吹谷公園の緑が生長するにつれ、そのボリュームを増しつつある。しかし、東エリアでは近年の屋敷地の緑の減少によってこれが相殺され、



図8 白壁地区における緑被の経年変化(東エリア, 1950年~2015年)
各図の下部の数字は、各年代の緑被率を示す。
(航空写真から得た緑被データをもとに筆者作成)

結果として2010年代には緑被率が大きく落ち込んでいる。

4) 両エリアの比較

以上の緑被の時系列的分析の結果をまとめると、次のようになる。

都心により近接した西エリアでは、戦後の土地利用変化のスピードが早く、かつてエリア内に点在した民家の庭先にあった小規模な緑は、不動産開発にともない徐々に減少している。近年マンションや事業所ビルの新設によって造園的な緑の微増がみられるものの、エリア全体として緑量は減少傾向にあるといわざるを得ない。緑被率の数値だけみると、比較的緑が維持されているようにみえるものの、その現れ方としては、主税町公園のように公的に管理された緑への局所化が進んでいるということが出来る。

それに対して、江戸期からの町割が保持され、戦後の土地利用が安定的であった東エリアでは、1990年代頃まで広大な屋敷地の庭の緑が維持されてきた。これに併せて1970年代に開設された山吹谷公園の緑も、このエリアの緑量の増加に貢献している。しかし、近年の不動産開発によりかつての屋敷地に大型マンションが建設されることで、庭の「すきま化」（宮城，1993）が進み、まとまった緑が失われつつある（写真2）。

IV. 緑に表れる持続的文脈

1) 分析のまとめ

本研究では、名古屋・白壁地区の歴史的町並みに現れる緑に注目し、持続性のある緑の空間的パターンを明らかにすると同時に、そのパターンを持続させている要因について分析することを目的とした。最後にこれまでの分析を振り返りつつ、若干の考察を行いたい。

白壁地区は、名古屋市内でも都心に近い市街地としては緑豊かなエリアといえる。IIでは、現在の緑の現れ方を把握するため、緑被のパタン化を行った。その結果、公的に管理された緑のほかは、軒先や敷地の縁にある小さな緑とまとまりとボリュームのある屋敷地の庭の緑が、このエリアに特徴的なパタンであることが判明した。

公的に管理された緑とは、戦後の土地区画整理事業のなかで整備された公園の緑である。白壁地区では、西エリアの主税町公園と東エリアの山吹谷公園という2つの大きな都市公園がまちに豊かな緑を提供している。軒先や敷地の縁にある小さな緑とは、古くからある民家の庭先に植えられた緑、あるいは近年建てられたマンションや事業所ビルに添えられた植栽の緑である。このパタンは東西両エリアに共通してみられた。

まとまりとボリュームのある屋敷地の緑は、東エリアにのみに現れるパタンである。持続性の観点からいえば、このパタンが白壁地区において最も持続性の高い緑であることが、IIIの緑被の時系列的分析より明らかになった。

過去の航空写真から緑被の経年変化を判読した結果、連続性が大きく、敷地の中を埋めるタイプの緑において、まとまりが比較的よく維持される傾向が確認された。緑の持続性を読み解くには樹高と樹種が重要な要素となるが、残念ながら、これらは航空写真からは判読困難である。とはいえ、現地調査の結果と過去の航空写真を照らし合わせることで、遡及的な推察はある程度可能である。

樹高については、IIで指摘したように、8mを超える高木の分布状況から、東エリアでは比較的樹齢の長い樹木が多く、緑の持続性が高いことが推定される。また樹種に関しては、西エリアにはない東エリアの特徴として、クロガネモチ、イヌマキ、モチノキなど、

在来種の優占するサイトが複数確認された。武家屋敷時代に遡る庭木中心の緑のあり方が現在まで受け継がれている、と解釈できるのではないか。

2) 緑を持続させる要因

以上のように、白壁地区において持続性のある空間パターンをもった緑は、屋敷地の庭に存在するまとまりのある緑である。では、そうしたタイプの緑を持続させている要因は何だろうか。

一つ目に、城下町時代から受け継がれた町割・地割といった歴史的フレームをあげることができる。これは、名古屋市が指定する4つの町並み保存地区でも、白壁地区に固有の要因といえる。Ⅲで明らかにしたように、東エリアでは、白壁町筋・主税町筋・榎木町筋を中心に旧城下町の武家屋敷地の町割が維持され、戦後も宅地分割されていない敷地が数多く残った。このことが、屋敷地の庭を維持させ、緑が生育するための空間的余地を与えたといえる。もう少し分析的に言えば、屋敷地の庭という形態（広さ）と機能（庭）が維持されていることが、白壁地区の緑を持続させる方向へ大きく作用したのではないか。町割や地割といった歴史的フレームの重要性は、かつて同じく武家屋敷地でありながら、戦後もなく町割や土地利用の著しい変化が生じた西エリアにおいて、このタイプの緑がほとんどみられないことから裏付けられる。

二つ目に、この地区における人と土地とのかわり方を指摘することができる。樹種に着目した分析からは、とくに東エリアにおいて、屋敷地の緑として在来種が多く維持されていることが確認された。もちろん、それらは必ずしも武家屋敷時代から残る樹木ではない。しかし、武家屋敷地であったこの地区の歴史的な風致や庭のあり方をめぐって住民の



写真2 屋敷地の庭の「すきま化」

(2018年5月筆者撮影)

かつては屋敷地の庭木であったと思われる高木が、マンション建設によって敷地の縁に取り残されている。

間に一定の共通認識が存在し、それが在来種中心の造園という選択を促していると仮説的に解釈することは可能であろう。その根拠の一つとして、Ⅱで論じたように、屋敷地が集中的に残るエリアで在来種のタイプが多いという傾向を指摘することができる。

3) 今後の研究展望

本研究は、名古屋の歴史的環境の空間コードを読み解く試みとして行った最初の調査研究である。町並み保全地区とはいえ、都心へのアクセスに優れた立地条件や閑静な住宅地としての高い評価から、近年の白壁地区では不動産開発が進み、町並みも大きく変化しつつある。しかし、本稿の分析が示唆するように、緑とつきあう人々の行動の基底には、白

壁という固有の持続的文脈をもった空間の履歴の中に自らの身を置き、その一部たろうとする意識的・無意識的な感覚が存在するようと思われる。そして、仮に空間の履歴に対する現代人の感性が綻びかけているとするなら、持続的文脈を可視化し、共有する研究実践が、まちの個性を育て、将来に繋ぐために役立つのではないかと筆者らは考えている。

今後、白壁地区以外の町並み保全地区にも対象を広げつつ、緑を切り口とする都市の持続的文脈に関する研究を進める予定である。白壁地区の調査に取り組むなかで浮かび上がったいくつかの課題にふれることで、本稿の締め括りとする。

一つは、調査地区の設定方法である。白壁地区の今回の調査では、帯状のバッチを対象エリアとして設定した。しかし、結果として敷地や街区を断片するエリア設定となり、町割・土地利用や緑被の変化をとらえるさいに不都合が生じた。同時に、これらの時系列的分析が調査エリア内に限定されたがゆえに、分析が断片的となり、白壁地区全体としての町割・土地利用の変化と緑被の変化の関係性を探ることができなかった。これらの問題は、調査エリアを街区単位で再設定することで、ある程度解消されるのではないかと考えられる。

もう一つは、緑にかかわる人への注目である。本稿では物理的な存在としての緑に限定した分析を行ったが、緑の持続性という意味では、緑の所有者や管理者、緑を見る人・楽しむ人など、緑にかかわる人たちに目を向け、緑とのつきあい方を明らかにする必要がある。緑を介した人と土地とのかかわりについて、深い考察を行うことを今後の課題としたい。

注

- 1) 以下の白壁地区の歴史的背景に関する記述は、東区制100周年記念事業実行委員会編(2008)、

溝口編(2015)に基づく。

- 2) たとえば、かつての森村組(現在の株式会社ノリタケカンパニーリミテド)は、1896年、現在の主税町公園一帯に大規模な絵付け工場を設立した。
- 3) 資料の種類によって入手できた年次が異なる。道路緑と建物を都市計画基本図から把握したため、町割および土地利用の分析では、都市計画基本図の年次(1958年、1977年、1996年、2015年)を基準とした。他方、緑被データの構築に必要な航空写真については、撮影年次や精度などの都合で都市計画基本図と年次を揃えることができなかったため、できるだけ近い年次の写真を用いることにした。
- 4) 住宅地図上に描かれた土地利用境界は必ずしも正確でなかったため、今回は地割の変化は分析の対象から外した。
- 5) 国土地理院提供の最新の航空写真が2007年撮影のものであったため、今回分析対象とした最後の年代のみ、より撮影年次の新しい名古屋市の航空写真(2015年)を利用することにした。
- 6) 1959年の住宅地図によれば、現在の主税町公園の南側に、当時の名古屋管区行政監察局や建設省地理調査所などが入る施設が立地していた。

文献

- 小浦久子(2008):『まとまりの景観デザイン—形の規制誘導から関係性の作法へ』, 学芸出版社。
- 竹中克行編(2016):『空間コードから共創する中川運河—「らしさ」のある都市づくり』, 鹿島出版会。
- 東京大学都市デザイン研究室編(2015):『図説都市空間の構想力』, 学芸出版社。
- 名古屋市教育委員会(1985):『名古屋市白壁・主税・榑木町並み保全地区保存計画』, 名古屋市。
- 東区制100周年記念事業実行委員会編(2008):『ひがし見聞録(東区制100周年記念事業記念誌)』, 東区制100周年記念事業実行委員会・名古屋市東区役所。
- 溝口常俊編(2015):『明治・大正・昭和 名古屋地図さんぽ』, 風媒社。
- 宮城俊作(1993):歴史的市街地における「にわ」を媒体とした空間構成単位の研究。『造園雑誌』, 57(2), pp.159-164。